View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyoto University Research Information Repository
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository
KYOTO UNIVERSITY

Title	呼瑪の日食(1) (日食報告號)
Author(s)	公文, 武彦
Citation	天界 = The heavens (1936), 16(184): 392-393
Issue Date	1936-07-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167275
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Kyoto University

呼瑪の日食 (1)

第4觀測隊
公文武彦

1 呼瑪への道

總指揮 荒木博士　花山天文臺—高倉，公文
上海自然科學研究所—栗原，千田，上谷，新城

上海組は地磁氣及び地電流の研究に，花山組はコロナの變動寫眞撮影を引受けて勇躍神戸を出帆したのが5月17日．20日大連着．午後上海より到着の千田氏を加へて一行7名は大連で案外手間取り22日夜漸やく大連發．明くれば車窓に展け行く南滿の初夏はいやが上にも朗らかである．首山堡，石磯山，沙河に日露の役を偲び，9時半奉天着．荒木隊長，千田氏は鐵路總局に御挨拶．殘餘の一行は鳥井氏の御案内で市内見物．北陵に通ずる道路には所々に穴が堀られてあるが，鳥井氏の御話しでは張學良の別莊が北陵近くにあつて，馬車(マーチヨ)が道路を破損するので其の防護策だと聞かされて一同苦笑．事變當時爆破された建物が鐵骨を曝してゐるのが特に目を惹く．北陵から城内へ，土煙の中に右往左往する群集，路傍に屋臺店を出して客を呼ぶ商人，赤色黄色の極彩色に目も眩む僅り，漸やく城内を一巡して，晝食の御馳走になる．奉天に一泊．翌朝發．寛城子を過ぎ日露の役に有名な梅澤旅團奮戰の地新臺子を通過，窓外は一望の沃野で僅かに1,2寸の豆が一面に打續く．茫然と汽車を見送る滿農の姿は内地では一寸と見られぬ風景である．馬沖河を過ぎて遙か左手の山上には滿洲軍の最終陣地の紀念碑が聳えてゐる．5時過ぎ公主嶺站に着く．此處は頗る落付いた感じのする驛で古色豊かな赤練瓦の建物を取圍く深綠の樹木，靜かに響き渡る汽車の鐘の音は旅人を靜寂の境ひ誘ひ込まずには置かない．忘然と眺め入る中に漸やく發車，特急アジアは遙か彼方に消え去つて影だに見えぬ．站の片隅にある機關銃座は事變當時の生々しい記錄を止めて——四圍は又廣漠たる平野，微かに川筋が光つて見える．夕方新京着夜に入つて市内見物に出かける．一同馬車を連ねて都大路を疾驅する事半時，坦々たる道路の兩側には盛んに大建築物を工事中で闇黑の野原を通ると見れば又大建築物の工事中右に左にネオンサインのダンスホ1ル，正に新京は魔

物である．恐らく此處數年の中には大都會が成長する事であらう．初めて躍進滿洲國の心臟に觸れた氣持がする．

翌日荒木先生，千田氏は關東軍へ，自分は山本教授から紹介下された方面へ御挨拶に出かけたが，自動車で總務廳へ驅けつけた迄はよかつたが，流しの自動車が無く馬車は言葉が通ぜず文字も分らず，通りかゝつた滿軍將校に筆談で道を聞く始末．正午前漸やく軍政部に佐藤氏を訪ねて，種々の模樣を承はつた．晝食は大和ホテルで觀象臺の人々と共にし，日食時の計畫，呼瑪の狀況等に就て談合する．16時新京發，都合に依り新京の磁氣觀測班に加はつた栗原氏と上谷氏，滿洲國官吏の三浦氏，軍政部の佐藤氏の方々と別れを惜んで雨中を北進，これで一行の人數は5名，愈々寂しくなる．涯しない草原を北へ北へ，西方遙かに沛然と降る雨に靜かに暮れる北滿の野は心ゆく許り靜かで，放牧の牛の群が悠然と草を食む姿も面白い．布海(フハイ)站着，新裝の驛には武裝兵の警備姿も凛々しく，燕の飛び交す姿も美しい．四圍は白樺の林，7時前松花江站着．白樺の林が谷間に連つて其處に滿屋が點在する．彼方の丘上には眞赤な夕陽が懸つて，綠のスロープは心憎い迄になだらか，荒木先生は悠然と葉卷をくゆらして車窓の景色を嘆賞する．高倉，新城兩氏は早速カメラを持ち出して得意のスナツプショツト，右窓近くの丘上に七色の虹が出現する．かつ消え，かつ現はれ，一重に二重に，行けども行けども綠のなだらかなスロープ，遙かハルピンの空は晴らしい．10時ハルピン着．北斗高く晴れ渡つて，木星輝く．翌日は荒木先生，千田氏と共に駐滿海軍測量隊を訪ね內田少佐に御目にかゝり磁氣測定器を御借りする．附近一帶に樹木多く長官公署街の名前も面白い．內田少佐邸に案內せられ晝食の御馳走になる．昔は舞踏會でも催されたらしい床で露人らしい建築である．

汽車は明朝でなければ無い．寸暇を得てハルピン風景を探る事にする．

夜は內田少佐の御招待で一同久し振りに日本座敷に打寬いで，三味線に日本酒を傾ける．ホテルのキヤバレーでも覗いて寢る事にしよう．翌日7時半發，線路の工合か，汽車は遲い．驛毎にフオームに降りて花を摘み廣野を眺む．此處等あたりは所有權の分らない土地も多いと聞く．次第に滿洲色深く，赤練瓦に黃色の驛とりどりの形に黑雲低迷して遙か彼方に大形の入道雲が叢々と二つ三つ四つ——，所々で雹が聞える．（續く）